

原村の寒さ厳しい冬が終わり、少し早めの春の風が頬をなでる頃、長かったと感じるような厳しい冬に、ある趣味に夢中になりすぎてあつという間の冬だったと語る農家の方の話を耳にした。

生き生き生きる人間力を培う村

## 見上げると飛行機雲



# Rural Relocation Vol.33

子育てなら原村 老後だって原村 やつぱ原村♪

原村の空は広い。同じ姿勢が続く畑仕事の合間に、伸びをしながら空を見上げる事も多い。上空の気温によって幾筋もの飛行機雲が跡を残す。それを眺めてはそこからの風景を想像したりするものだ。旅の人か仕事の人かどんな人が乗ってこの大地を見下ろしているのだろうか。と私といえればこんな考えが頭を巡るが、今回のご紹介の方は少し違う。いや、かなり違う。なんと、「俺も飛行機を操縦してみたい」そう思ったのだ。大地を耕す人が空に軌跡を残したいと思うようになったのだ。それはけっして不思議ではないが、その後がすごかった。今から25年前、旅客機のフライトシミュレーションに興味を持ったその方K氏（ご本人のご希望でお名前は伏せておきます）は、パソコンで楽しめるそのソフトがあると知り導入。畑から帰るとパソコンの前に座るのが楽しくてたまらなかった。本当のcockpitに近い計器類が画面に表示され2台のパソコンを巧みに操り飛行機を飛ばすのだ。本当に楽しくてしょうがない。しかしだんたんキーボードをタイプしている操作方法に納得がいかなかった。もっとリアリティがほしかった。テレビドラマでcockpitが映ればなおさらだ。そして、今から10年前に見つけてしまった。本物のcockpitに近それを。



しかし、すぐに買えるような物ではない。悩み、迷い、考えに考え、ついには9月に購入を決心。月の終わりに発注。それから3ヶ月後の12月下旬。ようやくK氏の家にそれは届いた。2階

の6帖間に組み立てられたのだ。

シミュレーション開始待ちに待ったその時がやってきた。早速動かしてみよう。さあ、これまた大変。勉強が足りないという警告音の鳴りつづな。実際の機体に近いから知識がないと動かない。離陸から着陸へとただ動かしていても警告が鳴るのだ。それでも楽しくて楽しくて仕方ない。講習会へ行った本を片手に勉強しながら寒い冬中、夢中で動かしていたという。取材の日、その勉強の成果を見せられた。椅子に座ると前方や天井のスイッチを押したりなや数字を合わせた慣れた手つきで設定していくとエンジン音が聞こえてきた。スピードがここまできたら離陸。何フィートまでは何ノット以上スピードを出してはいけないなど決まり事も多く、それらを難なくこなした。それからは富士山を眺めながら南へ飛んだ。飛んでしまえばしばらく何もせず景色を楽しむだけだ。景色は前面のモニターにプロジェクトターからの映像が映される。側面のモニターは現在、ハード的問題でセッティングされていなかったが、翌週には調整され合計3台のプロジェクトターからの映像が、臨場感あふれる空の旅を映し出してくれる事になっている。その完璧な状態でまたフライトしてみたいものだ。さて、取材時間の関係もあって近くの空港に降りることに。レーダーにはいくつか空港が表示され



ている。目的の空港を見つければ高度を下げると、積乱雲に突っ込んだらしく激しく機体が揺れる。気を取り直し、正面とレーダーとにらめっこしながら滑走路を探す。これがなかなか難しい。なかなか滑走路が見つからない。あれよあれよとあわてているうちに閑静な住宅街に綺麗(?)に着陸。操縦桿を手にしていたK氏は一言。「着陸が難しいんだ」。なるほど。今は自動操縦設定を勉強中。それが完璧になるとちゃんと滑走路を管制塔からの情報に従って降りられるようになるようだ。まだまだ楽しみがいっぱいで飽きることはない。ところが畑仕事が始まりました。今までのようにはいけません。あつという間の冬だった。これからは高原野菜作りの傍ら原村の広い空を眺めてイメージトレーニングし夜間に飛行訓練だ。

原の村人はまじめで黙々とよく働く。いつ息抜きをしているのだろうと心配になるが、皆それぞれに趣味を持っている。有名な芸術家や技術者に負けて劣らぬ秀でる技と心を培っている。絵を描く人、書を書く人、写真を撮る人など、文化レベルも高い。ただ皆、恥ずかしいからなのか、その趣味を語らない。知られていないだけ。田舎の人は奥ゆかしい。

原村の人間力の種と肥やしはこの自然の美しさ、厳しさだ。この自然は人が生き活きと生きる良い刺激がいっぱいある。